



認知症を呈する入院患者の背景疾患の頻度分析—Alzheimer病が最も多く(7-8割)、高頻度に認めるのは整形疾患群にである

認知症を呈する疾患は細かな病名に従って数えると100も200もあります。実際にはそのほとんどがAlzheimer病(AD)であります。日本では脳血管性が一番多いといわれた時代はすでに過去のことであります。今回以下のような調査を赤羽リハビリテーション病院職員の皆様のご協力を得て行い、注目すべき結果が得られましたのでご報告いたします。

平成25年10月から12月までに赤羽リハビリテーション病院に入院した患者さんのうちMMSEが23点以下の方を対象に、神経学的診察、心理検査と頭部CT scanを実施し、認知症あるいはMild Cognitive Impairment (MCI)が否かを診断しました。また、その背景疾患の頻度分析を行いました。

MCIとは正常加齢と認知症の中間的認知障害を示し、基本的になんとか自立した生活ができる状態で、Clinical Dementia Rating(CDR)0.5が適用される方たちです。一方認知症とは多種の認知機能が低下し、人様の世話にならなくなった状態を指します。従って問診や検査で記憶のみの障害の場合はMCIと診断されます(正確には健忘性MCI)。

調査では、新入院患者さんの中からランダムに54名を選択して解析しました。そのうち認知症あるいはMCIと診断された患者数合計は44名(37名が認知症で、7名がMCI)でありました。他の10名は失語症4名、意識障害3名、注意障害2名とうつ病が1名でありました。

認知症と診断されました37名は、整形外科疾患群が14名、脳血管障害群14名と廃用性疾患群が5名でありました。その他は無酸素脳症2名、進行性核上麻痺1名と頭部外傷による認知症1名でありました。

整形、脳血管と廃用疾患33例のうち最も多い背景疾患はADでありました。特に整形外科疾患群では14名中13名がADに罹患していると診断されました。脳血管性認知症(VD)は4例のみで脳血管群のみに認められました。また、いわゆるADとVDの合併と考えられる混合型認知症(MIX)症例は9名(脳血管障害群5名、整形外科疾患群1名と廃用群3名)でありました。従いましてADは整形外科疾患群の14名中の全員、脳血管障害群の14名中10名と廃用群5名中4名であり、合計

すると認知症と診断された37名中の28名(76%)はADということになります。一方、VDはMIXも加えて算出すると、13名ということになります。

その他、廃用群の中にレビー小体型認知症(DLB)に罹患した方が1名認められ、MCIと診断された方は7名で整形疾患群のみに認められました。この7名はADの前状態である可能性が高いという判断をいたしました。

以前の明生リハビリテーション病院のデータでは入院患者さんの約65%が認知症あるいは認知症前状態という解析結果でありました。今回はこのような解析は行っていませんが、ランダムに抽出した認知機能低下入院患者の背景疾患の大部分がADであることがわかりました。また、整形外科疾患群にかなり多くの認知症患者が認められ、その多くがADやMCIであることがわかりました。

ADは進行性の疾患です。回復期リハビリテーション病院への入院によって周辺症状の改善は十分望めます。ただし退院後に介入時間が少なくなれば中核症状の進行性悪化は予防できにくくなるかもしれません。退院後の生活を考えるうえで今回の調査結果を参考に、患者・家族指導を行っていくことをお勧めいたします。

この調査を受けて、2月から「物忘れ外来」を赤羽リハビリテーション病院でもスタートします。地域の認知症対策にも貢献できるよう微力ながら努力いたしますので、ご協力の程よろしくお願い申し上げます。

表：疾患群別認知症背景疾患とMCI数

疾患群	n	AD	MIX	VD	DLB	MCI
脳血管	14	5	5	4	0	0
整形	21	13	1	0	0	7
廃用	5	1	3	0	1	0
その他	4	0	0	0	0	0
計	44	19	9	4	1	7

n：症例数

AD：アルツハイマー病

VD：脳血管性認知症

MIX：混合型認知症 (すべてAD+VD)

DLB：レビー小体型認知症

MCI：軽度認知障害